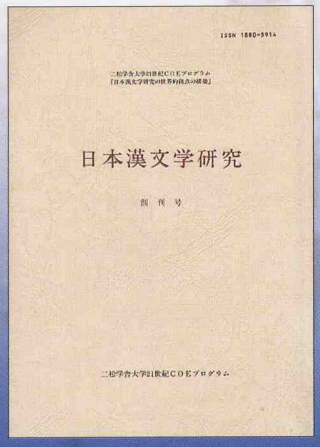
NEWSLETTER
SOSHOTSUJIN
vol.6

雙松通訊

二松學舍大學

21世紀COEプログラム
「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」

平成18年度活動計画



平成18年度班活動計画

研究レポート

研究計画

目次

平成18年度活動計画

1 平成18年度活動計画
拠点リーダー　高山 節也

平成18年度班活動報告

2 上古・中古日本漢文班
3 中世日本漢文班
4 近世・近代日本漢文班
5 日韓文化交流班
6 漢文教育班
7 字書・訓詁・語法班
8 日中文化交流班
9 書誌学・目録データ班

研究レポート

10 願文の読み方
COE客員研究員　後藤 昭雄

平成18年度COE研究員研究計画

12 上代の一次資料における用字法と文体の調査と考察
COE研究員　金子 正孝
13 『佛乗禪師東歸集』の基礎的研究
COE研究員　根木 優
14 日本における辞賦文学の受容と実作に関する研究
COE研究員　小嶋 明紀子
15 了誉聖冏における漢籍及び神道書の受容に関する研究
COE研究員　鈴木 英之

16
17 寄贈資料一覧（平成18年1月～平成18年7月）

18 活動・会議一覧（平成18年4月～平成18年7月）
19 ●講演会等　●現地調査等
●諸会議　●COE刊行物等　（平成16・17年度）

20 和刻本古文真宝書影集6
編集後記

平成18年度活動計画

拠点リーダー　高山 節也

本プログラムもいよいよ3年目に入ってはや5ヶ月を経過した。先に本誌5号では中間評価以前の総括報告を行ったが、それを踏まえて平成18年度、さらにはそれ以降の計画を設定する時期とはなった。5月には中間ヒアリングも経験して、その結果如何の不安もさることながら、とにかく事業のより充実した展開を実現するべく、研究体制とメンバー個々の意識を見直し、新たな実践に邁進しなくてはならない。

ただプログラム全般としては、18年以降の活動大綱はすでに明らかにしているので、ここではそれに沿って、18年度を中心に具体的に説明しておきたい。

従来我々のプログラムにおける4本の柱を中心として説明を行ってきたが、徐々にそれらのなかでも特に重点の置かれる部分や、方向性に変化が見えてきたところがある。

1. データベースの構築

データ関連事業についていえば、従来の書誌情報のデータ蓄積を継続して、国内について18年度は近畿・中国・四国を調査対象とすることに変更はないが、その他に文献の全文データの公開や、一般漢籍の全文訓読データの公開など、研究資料の充実のみならず一般への啓蒙的趣旨にも適うデータの蓄積を計画するにいたった。なかでも一般漢籍の全文訓読データは、『論語』や『史記』といった著名な漢籍に全文訓読を施してこれを公開し、日常的かつ身近に訓読を検索しうるようにすること、これは現在日本が直面している日本人一般の漢文離れの実態に、いかにして対応して漢文に目を開かせるかという問題に関わっての計画なのである。

2. 啓蒙的事業関連

一般向けの啓蒙的事業としては、勿論それのみで全てよしとしているわけではなく、たとえば全国の高校生や大学生を対象とした漢詩のコンクールを、大学と協力して実施するなどの、より一般的な事業も計画しているし（今秋実施のことが決定している）、前後期に行われる各種の講座の一般公開は勿論のこと、さらに一般向けの講座（たとえば一般からテーマを募って実施）も展開するべく、企画を練っているところである。さらに昨年度開催して多くの聴衆を得て大変好評であった、一般対象の「シンポジウム『論語』」も再び秋に開催の予定である。

3. 国際協力関連

また国際関係についていえば、18年度は当初の企画にあった朝鮮関係の「東アジア近世儒学（実心実学）に関する国際シンポジウム」に加えて、中国浙江工商大学との共催による、国際シンポジウム「ブックロードと文化交流～日本漢文学の源流～」を中国杭州で開催し、国内のみならず海外でのシンポジウムを企画して、双方向での文化交流の実現を目指している。さらに台湾やタイでの事例に見られるような、本学側からの海外への人材派遣を増加させて、日本文化の海外への浸透をはかり、特に日本漢文や漢文訓読、さらには日本漢文関連文献書誌等の教育・普及・協力活動に力を尽くし、国際交流の実を挙げることを企画している。シンポジウムに付随して行われる、海外拠点リーダー会議においても、国際協力・国際支援の具体的事例を検討することとなろう。なお18年度の海外文献調査はヨーロッパの一部地域（オランダ・フランス・イギリス・ドイツ・ロシア）を中心に実施される予定である。

4. 訓読教育関連

これまでは大学一般学生対象の教科書作りを主としてきたが、今後はそれらの改訂と平行して、現在の訓読法においては対応できない、江戸初期以前の訓読に対応するための新たな取り組みを開始し、それらに即応する漢文教育のためのテキスト編纂や、訓読事例データの蓄積と公開に向けた資料収集と研究活動にとりかかった。

なお『日本漢文学研究』第二号については、各研究班の成果報告を中心に、海外拠点リーダーや代表的研究者の寄稿などを見込んだ編集作業を開始した。全体として、一般への啓蒙的視点と訓読関係への視点の増加に加えて、より濃密な国際関係を構築して、さらに漢文学の日本学としての意味づけを問う方向性が顕在化してきているといえそうである。

上古・中古日本漢文

主　任：白藤 禮幸
担当者：山崎 正伸　吉原 浩人　谷本 玲大
協力者：河野 貴美子

平成18年度班活動計画

この班は、3つの部からなる。

漢字・漢文の受容と発展の相を示す古代を専門とする白藤は、古代においてどのような漢文文献が作られたか、という関心から、諸種の叢書に収蔵されている文献名をカード化する作業を続けているが、その作業の範囲をさらに広げて行き、図書館・文庫などの複製・善本叢書などについてもリスト化する。また、訓読文資料の整理を行なう。漢文大系・国訳漢文大系・国訳大蔵経や、明治書院・集英社等の叢書等、読み下し文のある漢文文献のリストを作成する。

訓点資料の訓読文の基礎資料は昨年度、「国語年鑑」等によって作成したが、今後は学会誌の本体に当たり内容を確認する。また、関係する単行本に収められている資料のリスト化を行い、一覧表を作成する。残されている作業としては、日本漢文文献についての、文学・語学・史学的研究文献リストの作成がある。その準備作業を今年度に計画したい。

吉原・河野班は、平安朝を代表する漢文学者大江匡房（1041～1111）、同時代の学僧永観（1032～1111）の著作の研究を続けてきたが、本年はその文章構造の分析、出典研究、註釈を重ね、永観の「往生講式」「三時念仏観門式」の註釈である、『永観講式註釈』を今年度刊行する。そのため、興福寺・東大寺・薬師寺などでの資料調査を行なう。

匡房が太宰府で撰述した作品群の、校訂本文の作成、註釈、読み下し文、現代語訳、構造分析、解説、文献一覧などから成る報告書『大江匡房安楽寺作品群研究』（仮題）の作成をも計画している。

その他の、永観の『往生拾因』や、匡房の他の作品については、諸本調査と註釈作業を並行して進め、次年度以降に結果を出すことを目指す。これらの研究の成果は内外の学会・シンポジウムなどで発表を行い、論文としても結実させる。河野は先の註釈・研究活動以外にも自身の研究テーマである、善珠などの著作の調査を進める。

山崎・谷本班は、昨年度に引き続き、『新撰万葉集』の原本調査を行なう。特に、これまで指摘されることのなかった、京都大学本系の諸本にみられるヲコト点に注目し、そのヲコト点の系統、加点の時期の究明、点図の帰納、ヲコト点による読み下し文の作成などの調査研究を行なう。この系統に属するとされている大阪市立大学本が、同大学総合図書館の資料では不明であるが、さらに調査をする必要がある。

また、広本系と目されるものの、未だその本文状況や書誌的情報が報告されていない、お茶の水図書館本の調査を行なう。略本系としてわずかに残されている、熊本大学北岡文庫寄託、永青文庫蔵本についても原本調査を行いたい。

別に、このたび、本学に寄託された橘家旧蔵書中の写本（零本）については、その本文の系統上の位置を明らかにし、その上で、価値・意味があれば冊子として刊行することも考えられる。他方COEのホームページで画像を公開することも予定している。

中世日本漢文班

主　任：磯 水絵
担当者：田中 幸江
協力者：福島 和夫　新井 弘順　小川 剛生　高橋 秀城　滝沢 友子

平成18年度班活動計画

昨年度、『日本漢文資料　楽書篇』3冊を報告書として刊行したが、中間報告に間に合わせることを前提としたため、一部掲載を断念したものがあった。そこで、本年度はその補遺を第二輯としてまとめることから始める。

具体的には、『日本漢文資料　楽書篇』「雅楽資料集」における上野学園日本音楽資料室架蔵雅楽史料目録および明清楽関係史料目録の追加、架蔵史料紹介、中世漢文日記関係の論考、音楽記事年表の追加、同『声明資料集』における伽陀索引の充実、講式研究の論考の追加が早急に計られなければならない。

本年度（4月）から磯の大学院の授業はCOEによる公開講義となり、他大学院生、聴講生を加えて『教訓抄』の共同研究を開始している。当該研究は、この2年間に作成してきた『藤原通憲資料集』『日本漢文資料　楽書篇』を基にした楽書研究―『教訓抄』の研究―の一環である。授業においては、来年度からの注釈研究の誌上発表を視野に入れた指導育成を心掛けているが、なお研究人口の不足に悩まされている。多くの若手研究者の参加が望まれる。中国音楽資料、日本の男性漢文日記、楽書、説話等に興味のある研究者の積極的な参加を要望したい。

本班主任の磯の個人研究としては、第一に『日本漢文資料　楽書篇』に掲載した中山忠親の日記資料を基に、12世紀音楽史の解説書をまとめることが本年度の目標の第一である。上記のように研究者は恒常的に不足しているから、その底辺拡大を図らなければならない。そこで、指導書の作成を構想した。また、併せてこれまでの論文を取り纏め、それ以前の音楽史研究を一書にして、読者の便に供したいとも考えている。藤原通憲に先行する大儒、大江匡房の伝記もまとめたい。

田中の個人研究としては、前述した『日本漢文資料 楽書篇』「声明資料集」の第二輯刊行に従事するとともに、前回編集作業に追われて完結しなかった『鎮守講式』の研究を続行、注釈・論考の誌上発表を目指す。また、「声明資料集」の第二輯編集に関して述べるならば、前回暫定的に付した上野学園日本音楽資料室所蔵講式の史料番号を訂正し、その一覧を掲載する必要がある。その他、日本音楽資料室所蔵講式写真目録、伽陀索引、前回の講式解題目録の索引も作成し、第二輯に掲載する予定である。

以下、『日本漢文資料 楽書篇』「雅楽資料集」、同「声明資料集」の第二輯の内容（予定）を示し、本年度中世日本漢文班の研究計画としたい。

『日本漢文資料　楽書篇』「雅楽資料集」第二輯　内容（予定）
史料研究（箏相承系譜集、春日楽書『楽記』『荒序旧記』翻刻）、論考（『明月記』音楽記事年表、『玉葉』音楽記事年表他）、日本音楽資料室所蔵明清楽関係史料目録、雅楽関係史料目録稿（稲葉与八旧蔵楽書類、久迩宮旧蔵雅楽器付属文書、明清楽関係史料目録、補遺他）。

『日本漢文資料　楽書篇』「声明資料集」第二輯　内容（予定）
『鎮守講式』注釈・論考、日本音楽資料室所蔵講式史料一覧（訂正版）、日本音楽資料室所蔵講式関係史料写真目録、日本音楽資料室所蔵講式伽陀索引、日本音楽資料室所蔵講式目録事項索引、第一輯訂正・補遺。

近世・近代日本漢文班

主　任：町 泉寿郎
担当者：森野 崇　大島 晃　揖斐 高　山辺 進
協力者：ロバートキャンベル　長尾 直茂　楊 佳 香　清水信子

平成18年度班活動計画

研究会「江戸前期の和刻漢籍・漢籍注釈の研究」

本研究課題は、これまで大島担当者が中心に進めてきた課題であり、一面では17年度末に刊行した倉石講義ノート（本邦における支那学の発達）整理の過程で、その研究の必要性が更めて確認された課題である。すなわち、新注学が13～16世紀の日本にどのように伝来し、江戸期の漢学にどのように接続したかの問題は、日本漢文学研究の極めて重要な課題であるが、いまなお十分な研究の蓄積を有しない。

この問題解決の糸口をつかむために、18年度から江戸前期までの古活字本・和刻漢籍・鼇頭注本・俚諺抄などを研究対象とし、それらの本文・書入れ・返点・送仮名・注解等から見た問題点をとりあげて、倉石講義ノート整理担当者を中心に（院生諸君の自発的参加を歓迎する）、月一回程度の研究会を開始することとした。2～3年後をめどに、輪読の成果としての訳注と、参加者の論文集の公刊をめざす。

研究会「三島中洲研究会」

18年度も引き続き月例会を継続していく。前記「江戸前期の和刻漢籍・漢籍注釈の研究」が（中世～）江戸前期の漢学を対象とする研究会であるのに対し、本研究会は江戸後期～明治大正期の漢学を対象とする研究会と位置づけられる。この2年間の研究会実施によって、三島中洲その人、および三島の生きた時代とその学芸・文化をめぐる諸問題について、日中関係史・近代教育史・中国思想史・日本思想史などの多様なアプローチが蓄積され、学祖顕彰にとどまらない近代文明史の探求へと、次第に研究範囲を拡大しつつある。

基幹研究「漢学者伝記資料に関する研究」

従来この分野に蓄積には、姓名字号・生地・没年等を記した人名録に『儒海』『漢文学者総覧』等があり、伝記資料集に『事実文編』『史氏備考』等があるが、それぞれに精粗があって、改訂増補の必要性は研究者に共通の欲求であると考える。特に、近年、研究の進展著しい明治期の漢詩人・漢学者について、重点的に資料収集と整理を行う。揖斐・大島・町・山辺各担当者、長尾・キャンベル両協力者らの意見を集約しつつ進めていく。

基幹研究「江戸漢学書目・江戸明治漢詩文書目の編纂」

本課題は、町担当者・上地宏一協力者（総括班）・岡野康幸研究助手・新井洋子本学非常勤助手が主に推進し、17年度末に各一冊の報告書をもって一応の完結を見た。

18年度は、この研究成果をさらに継続・発展させるべく、以下のことを実施、または計画中である。

○国文学研究資料館における「日本古典籍分類概念表の確立と古典籍総合目録データベースにおける分類化促進」（研究代表者鈴木淳教授）の研究会への参加・提言
○両書目の補完作業（とくに明治期資料に関する各種目録からの増補作業）
○両書目データベースのWEB公開
○主要典籍に関する提要の作成

事例研究「漢方医書に関する文献研究」

本課題は、町担当者、小曽戸洋（目録データベース班）・上地両協力者が、17年度から継続中の医家伝記資料『日本医譜』のテキストデータベース化を継続し、順次WEB公開する。これに関連して、日本医家の墓碑拓本のデータベース化を計画中である。

また18年度からは、町担当者・小曽戸協力者は曲直瀬家（今大路家・養安院家・亨徳院家・寿徳院家）、八尾・田中弥性園家の研究に着手した。曲直瀬家資料については、慶大図書館・武田科学振興財団杏雨書屋の協力を得つつ、進める。

事例研究「日本近代における漢学・漢文学―幕末明治・大正昭和」

幕末明治期に関して、清水信子協力者と町担当者は、前年度に引き続き電気通信大学・佐藤賢一氏らと協力して、東京大学総合図書館南葵文庫の調査を継続し、海保漁村・島田重礼の旧蔵書を中心に資料調査を行う。

また、17年度の資料調査によって新たに資料を見出した明治初期の東本願寺派僧侶の活動については、川邉雄大研究助手と町担当者が研究に着手した。

山辺担当者は、16年度の資料調査で見出した亘理伊達家「伊達文庫」の調査を開始する。「江戸時代に於ける武士階層の教養形成と郷学」という視点のもとに、仙台藩儒桜田虎門の著作と郷学「日就館」蔵書、および家臣による講義録の作成等に焦点をあてる予定である。

大正昭和期に関しては、山辺担当者が17年度に引き続き随鷗吟社の活動（第二期:明治末期まで）に関する研究を進める。

日韓文化交流班

主　任：小川 晴久
担当者：芹川 哲世

平成18年度班活動計画

特にCOEプログラムへの貢献

一、韓国漢学・漢文学研究の動向研究

この二年間に集めた『韓国漢文学研究』（既刊分35冊）を概観・分析し、韓国漢学・漢文学の概念規定、研究分野、特徴点を把握する作業にはいる。日本漢学とは何か、日本漢文学とは何かを明らかにする本COEの課題にとって、韓国のそれとの比較研究はとても意味がある漢学・漢文学はとかく経学中心に考えられてきたが、漢訳仏教や僧侶たちの業績を含める視点が弱かったという認識が韓国でも見られるか否かも調べたい。

二、朝鮮総督府編纂漢文教科書の分析

この二年間で収集した上記教科書の内容分析の作業に入る。

三、韓国漢文教科書の分析

一昨年の漢文教育国際シンポジウムの準備として収集した韓国の漢文教科書（中学と高校）の分析を行う。

四、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の漢文教科書の分析

収集できたものは少数であるが、この分析にも入りたい。

五、韓国の大学における漢文教科書・教材の収集

これは全く新しいアイデア（芹川氏発案）で、今期から収集に入る。本学で漢文教科書作りに入ったので、その比較研究である。

六、「朝鮮実学」の教科書記述の調査

17世紀～18世紀に花開く朝鮮実学が現在韓国の教科書でどのように記述されているかを調べる。実心がどの程度強調され、注目されて始めているかが私たちの関心事である。

この作業は今秋（10月14～15日）の東アジア近世実学シンポジウムに参加する準備作業でもある。

七、朝鮮朱子学（李退溪、姜_ら）の日本への影響調査

姜沆を介しての藤原惺窩への影響、李退溪の崎門学派への影響など、引き続き調査する。

八、韓国陽明学研究の動向把握と交流

海外拠点リーダーの沈慶昊先生（韓国、高麗大教授）から韓国で1990年代以降韓国陽明学が、若手を中心に飛躍的に進んでいることを最近伺った。金教斌氏を中心とする鄭斉斗（韓国陽明学の祖）研究、沈慶昊氏らの江華学派の研究である。研究動向をつかみ、文献を集め、交流を開始したい。

この調査は朝鮮・韓国儒学が朱子学だけでなく、陽明学からも成り立っていること、17世紀～19世紀中頃の実学が、実心の要素を豊かにもった実心実学であったことを資料的に裏付ける作業でもあって、とても重要なものと考える。

九、日本と朝鮮の文学交流の資料収集

今年度から新たに芹川哲世担当者が入られたので、以下の二つの課題に取り組む。

（1）日本と朝鮮の文人たちの交流は8世紀奈良時代に始まり、渤海との交流が途絶えた10世紀半ばまで行われた。新羅・渤海との使臣との間に交わされた詩文の交流の様子は上代の「懐風藻」をはじめ、中古の勅撰漢詩集及び「菅家文集」、「都氏文集」など個人の詩文集また、「本朝文粋」等に収録されている。

朝鮮の使臣のものは一部が「渤海誌」等に掲載されているが、これらのものを可能な限り収集し、現在までの研究成果を踏まえて交流の様子を跡付けたい。

（2）これまでの日本と朝鮮の文学交流史の研究は主に江戸時代の通信使を中心としてかなりの研究が集積されてきたが、南北朝・室町時代を経て秀吉の朝鮮侵略以前までの約200余年はほとんど空白の状態におかれていた。日本からは主に僧侶たちが回礼使として遣わされ、朝鮮の文人との詩文交流が活発に行われた。日本へ使臣として派遣された文人または接待にあたった文人たちの数多くの文集を通して知られる日本側の多くの僧侶たちの実態は、ほとんど明らかにされていない。天竜寺、相国寺、東福寺など五山を中心とする寺に籍をおいていた文溪、知融、梵齡など多くの文人僧侶が朝鮮の成石璘、徐居正、金安国など一流の文士達と交わした詩文の交流を跡付け、また、鄭夢周、朴敦之、宋奇璟、申叔舟などが日本に来て展開した日本の文人僧侶達との文学的交流跡を調査したい。そのために日本の文人僧侶達の詩文集、朝鮮文人達の文集を入手する必要がある。

漢文教育班

主　任：家井 眞
担当者：小川 晴久　吉崎 一衛　森野 崇　山辺 進
協力者：田中 正樹　石毛 慎一　小金澤 豊

平成18年度班活動計画

本年度は、昨年度にひきつづき、次の四つの事業について推進する予定である。

一）昨年度に作成・出版した大学漢文教科書の見直しと改訂・統合を行う。

二）中国文学・思想の専門教養を学ぶためのテキスト、中国文学科用教科書を作成し、出版する。

三）明治以後に出版された漢文教科書の収集を図る。

四）近・現代に於ける漢文教育の歴史及び現状についての研究を行う。

具体的な事業計画は、以下のとおりである。

一）昨年度に作成・出版した大学漢文教科書の見直しと改訂・統合を行う。

＊春セメスター：「中国文学講読①」、秋セメスター：「中国文学講読②」に対応する教科書

1. 昨年「中国文学講読！」に対応するテキストとして、吉崎一衛『二松漢文　基礎漢文―漢詩編―』を出版した。今年度はこのテキストの内容等を吟味し、補訂を行う。
2. 昨年「中国文学講読”」に対応するテキストとして、小川晴久『二松漢文　基礎漢文―思想編―』を出版した。今年度はこのテキストの内容等を吟味し、補訂を行う。
3. 上記の作業を通じ、『二松漢文　基礎漢文』（仮題）として一本に纏め、出版を図る。

二）中国文学・思想の専門教養を学ぶためのテキスト、及び中国文学科用教科書を作成し、出版する。

1.「日本漢文」（散文）テキストの作成
2.「中国文学」テキストの作成
3.「中国思想」テキストの作成
4.「朝鮮漢文」テキストの作成
5.「漢文読解・訓読法」についてのテキスト作成の準備と作成

三）明治以後に出版された漢文教科書の収集を図る。

1. 漢文教科書の収集は、一応昨年度をもって終了したのであるが、今年度もひきつづき古書店（松雲堂・文行堂等）に依頼して収集を図る。
2. 現在発売中の教科書・指導書の購入を図る。

四）近・現代に於ける漢文教育の歴史及び現状についての研究を行う。

1. 事業推進担当者・協力者・本学教員・大学院生を中心として、学外の研究者及び現職高等学校教員の協力を得て研究会を組織し、我が国に於ける明治以後現在に至るまでの漢文教育の歴史と現状、及び中国・台湾の古典教育について研究する。
2. 研究会は年2回程度開催する。
3. 平成20年度を目途に、研究成果を纏め論文集として出版するよう努める。

字書・訓詁・語法班

主　任：佐藤 進
担当者：白藤 禮幸　谷本 玲大
協力者：大島 正二　小方 伴子

平成18年度班活動計画

プログラム発足当初の「日本漢字音・辞書・字書」班の名称は、今年度から「字書・訓詁・語法」班と改めた。当班の担当者および協力者には中国音韻学の専家が含まれるが、日本漢字音研究の拠点を築くには、たとえば中国史学専攻を日本史学専攻に切り替えるほどのエネルギーが必要であり、率直に言って今はその余力がない。何といっても、二年目の中間評価を含め、最終年度の五年目までに、一定の評価に耐える研究成果を産み出すことが課されるからである。

当班の17年度における活動は、(1)研究報告書『漢文文法と訓読処理』の刊行と、(2)『類聚名義抄』データベース作成、の2点であり、前者は刊行を果たし、後者は親字と和訓のエクセル入力を完了した。18年度は以下の3つの事業その他を行なう。

(1)上記『類聚名義抄』既入力和訓の校正作業と例文入力。

今回の我々の計画においては、『類聚名義抄』の漢字見出し項目のすべてについてデータベース化することは考えていない。日本の漢文訓読を検証するために、『類聚名義抄』の和訓と、現存する漢籍の古訓点例文を結びつけるのが目的であるからである。それをネット上で公開提供するために、文字コード上の問題がおきないBig5コード所収の漢字について、『類聚名義抄』和訓データベースを作成した。

今後の作業としては、入力済みの和訓の校正作業はPC画面で行なうと校正洩れが出るので、まず全データを印出して紙面上で校正作業を行なう。

校正がすんだ親字と和訓の項目について、漢文の例文を入力する。本年度入力予定の例文の材源は、
①中村宗彦編『九条本文選古訓集』、②寛文六年刊和刻本『文選』、③堀杏庵点『春秋経伝集解』、以上の三点をまず考えたい。そのうえで余裕があれば、④『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝』をとりあげたい。

(2)毛利貞斎『増続大広益会玉篇大全』データベースの作成

該書は宋・陳彭年『大広益会玉篇』をもとに、偏旁引きにして親字を増補し和訓を加えたもので、元禄四年(1698)に刊行され、明治になっても洋装本で版を重ねるなど、よく普及した漢字字書である。上記の『類聚名義抄』が平安後期の和訓を留めるものであるのに対し、該書は江戸中期以降に整理された和訓の面貌を伝えるものといってよい。幕末から明治を経て、今日現行の漢文訓読の基盤を考える上で、重要な手がかりをあたえてくれるものと期待できる。

該書の基本的な入力については、すでに谷本玲大班員がすませている。そもそも、当班主任の佐藤が着任する前から、当班の具体的な研究事業として掲げられていた企画であった。しかし、佐藤の力不足から、本年から本格的な取組が始まることになったことを、とりわけ谷本班員にお詫びしたい。

今年度はその既入力データに関して校正を行なうことが必要である。その具体的な手順等についての検討をするところからスタートする予定である。

(3)基本漢籍テキストデータベースの作成

基本漢籍の書き下しテキストを全文データベースとし、検索可能なシステムを構築する。海外の日本学研究者から強い要請のあったシステムである。

本年度においては、①国訳漢文大成のなかから、経部の漢籍のスキャナ読み込みを順次おこない、一方、②惺窩点『詩経』を手作業で入力する。後者については、班員佐藤進の実施する公開講座の教材に使用しているので講義と並行しての入力作業となる。

惺窩点は、1600年代前半の訓読ではあるが、平安鎌倉時代の古訓を伝える読み、復古的な文選読みを作為的にほどこした読み、博士家が採用を慎重にした朱子の新注にもとづく読み、以上の三層の訓読が複雑に混在するものである。それをネット上でどのように表現するべきかが重要な課題になろう。

(4)その他

その他として、①『日本漢文学研究』に当班からの論文を掲載すること、②浙江工商大学における国際シンポジウムにおいて当班からも研究発表をすること、などが予定されている。②では、佐藤が20世紀初頭の中国では不可能であったコロタイプ印刷の技術者、小林忠治郎について報告する。甲骨文や敦煌文書や宋刊本などを日本で精密に複製し、研究の基礎資料を提供するうえで多大の貢献をなしたからである。

日中文化交流班

主　任：佐藤 一樹
担当者：竹下 悦子
協力者：陳 捷　劉 建輝　戦 暁梅

平成18年度班活動計画

昨年度に引き続き、シンポジウム『論語』を大学が中心となって開催する。日本の現代的課題を前提に進行しがちだった昨年度にたいし、今年度は『論語』が日本の各種、各層の文化のなかでの拡がりに視座を定め、とりわけ『論語』の学び方として長年重んじられてきた素読に焦点を当てる予定である。文章の内容理解に先んじて、音読に習熟することを重んじる素読という読書方法には、現代の教育方法にはない長所がある。素読で養われる独特の言語感覚など、国語力、漢字力の水準低下という現今の状況は、過去の素読という手法がもっていた意義をもういちど考え直す機会でもある。シンポジウムではまた、中国の歴史や文化を日本との比較文化的視角から旺盛な執筆活動を続けてこられた陳舜臣氏を囲んでの座談会も計画している。

さらに今年度は他に二つのワークショップを開催し、昨年度のシンポジウム「漢文学の近代的転回」に引き続き、江戸後期から明治の過渡期において、漢文学が近代文化の形成にどのように位置づけられるか、共通の理解を深めていきたい。第一のワークショップは、日本語の文体として漢文を捉え、言文一致体など新たな書き言葉の形成、それにともなう日本語学習や発想法の変化などについて、複数の講師に発表いただく。これまでの研究から、近代のおける漢文学の研究は教育やイデオロギーとの分野と結びつけて論じられることが多かったが、近年では、西欧の言葉の翻訳語彙や明治のジャーナリズムで多く用いられた新たな書き言葉など、語彙、観念や文体と漢文学との関係に関心が集まっている。昨年のシンポジウムに引き続き、議論を深めていきたい。

第二のワークショップでは、漢文学研究に最も欠如していると思われるしっかりした理論枠組みを構築する可能性について、アメリカから指導的立場にある日本研究者を招いて議論する予定である。ある文化が内包する多様性や多義性、文化が生成される環境や力学、あるいは近代性の諸問題など、他の研究分野との垣根が概して低いアメリカの研究者の知見には学ぶところが多い。徳川時代から明治時代にかけての文学、歴史、思想などを専門とする研究者をお招きする予定である。二つのワークショップとも、本学のCOE担当者、および大学院生を中心とし、学外からは関連の研究者のみを招く小規模な勉強会として開催する予定である。

最後に今年度より、日本文学、語学を研究対象としている学内の教員の協力を受け、それぞれの研究と漢文学との接点について考察、発表してもらう場を設けることを考えている。中国学を専門とする担当者で構成されている日中文化交流班にとって、日本関係の専門家からの助力は欠かせないが、まず学内の関係者にそれぞれの視点から、近代の漢文、漢文学に何らか関わる問題の提起を受けたいと考えている。

書誌学・目録データ班

主　任：高山 節也
担当者：町 泉寿郎
協力者：高橋 智　真柳 誠　小曽戸 洋　上地 宏一　會谷 佳光

平成18年度班活動計画

18年度書誌学・目録データ班の活動としては、以下の2点6項目に分類される。

1 データベース関係

①所在書誌データの蓄積

②全文データベースの構築

③医学関係データの集積

2 邦人序跋集成関係

①一般和刻本漢籍序跋収集

②和刻本医書序跋収集

③和刻本仏書序跋収集

以上逐条的に計画を述べる。

1 データベース関係

本来我々の班における基本活動として位置づけられたもので、従来の活動の継続的部分が大きいが、新たなデータ蓄積やデータベースの構築に係わる計画もある。

①「所在書誌データの蓄積」については、過去二年間、北海道地区・東北地区・中部地区のデータを収集し、これを「日本漢文文献目録データベース」に入力してきた。18年度は近畿・中国・四国を対象として目録の収集をおこない、該当資料の抽出と入力を実施する。また現在も継続して入力資料の公開作業を実施しているが、公開のための資料への手入れ（分類項目の確定・書名人名のふりがな・公開非公開の選択等）を行いつつ、作業が行われるためかなりの時間を要する作業となっている。

②「全文データベースの構築」の計画は、すでに本プログラムの当初から案として存在していたものであるが、二年間の成果や活動内容の検討から、今年度以降具体的に実践していくこととなった。その典型的例は、基本漢籍の全文訓読書き下しデータベースの作成と公開であるが、対象の選択と書き下し文の作成そのものは、漢文教育班あるいは辞書・訓詁・語法班が担当するもので、我々としてはそれに対応するデータベースの構築、あるいは現存する機構の改良を行うこととなろう。

③「医学関係データの集積」については、すでにデータとして全文入力のほとんど完了しているものとして『日本医譜』があり、校正終了後公開の予定である。これを公開する機構についても、②「全文データベースの構築」において計画されている機構を利用することとなろう。

なお、データベース関係の対外的紹介と外部機構との連携、あるいは多様なデータベース情報の収集に関して、国文学研究資料館との協力や、国内外の情報関連学会へのメンバーの派遣といった事業があることを付記する。

2 邦人序跋集成関係

前年度からの継続事業であるが、収集と平行して入力に入るべき時期に至っている。なおこの入力には画像処理が必要となる。

①「一般和刻本漢籍序跋収集」については、前年度までに二松学舎大学附属図書館所蔵和刻本漢籍経部の資料収集を終了し、現在国立公文書館内閣文庫蔵和刻本漢籍経部（6月1日現在　群経總義類まで完了）・慶應義塾大学斯道文庫蔵和刻本漢籍経部（6月1日現在　礼類まで完了）の資料収集を進行中である。18年度中には内閣文庫分を終了の予定である。なお、19・20年度を経て、その時点での経部資料収集全体の総括を行う予定である。

②「和刻本医書序跋収集」については、北里医史学研究所収蔵資料の分類をおおむね終了し、基本データを収集する段階にいたっている。本年中には全資料の入力までを完成させたい。

③「和刻本仏書序跋収集」については、成田山仏教図書館収蔵資料の収集は終了し、現在その他の東京近郊の諸機関収蔵資料の収集中である。点数としては延べ約1000点を超えた資料を集めており、中間報告の形でデータ公開あるいは冊子目録の発表等、現在企画中である。

なお、これらの資料データの公開については、進行速度に当然のことながら遅速の差があり、なおかつそれぞれ極めて特異な文献群であるため、報告書等の作成については、それぞれの特質を生かした編集方針が採られるべきで、担当分野ごとのデータ整理と公開を行うこととしたい。

願文の読み方

COE客員研究員　後藤 昭雄

研究レポート

『本朝文粋』や『朝野群載』に見るように、平安時代に制作された漢文には多様な文体がある（『本朝文粋』には雑詩も含めてではあるが、38種の詩文を収める）。それぞれは個別の文体、目的、機能を持っている。作品を読むに当たっては、それに従って読んでいくわけである。それぞれの文体の論理構造、特徴、目的などを正しく理解していなければ、文章を正確に読み解くことはできない。

平安時代に多量に作られた文体の一つに願文がある。詩序や奏状、表などと共にきわめて日常的な漢文であった。清少納言が『枕草子』の「文は」の段で、中国の作品としては『文集』『文選』などを挙げ、日本のものとしては「願文、表、博士の申し文（奏状）」を挙げるのは、これらが、もっともポピュラーな文体の作品だからであった。

願文は、死者の忌日に冥福を祈って行われる供養や寺院建立の法会などに際して、その仏事、祈願の趣旨を述べた文章である。そうして、それは施主の立場で書かれる。これが通説である。そのことは、類似の文章として表白と対比して述べられることが多い。表白（ひょうびゃく）と願文との違いの要点は、表白は表現の主体が法会の場の導師（僧侶）であるのに対して、願文は施主である。そのように一般に理解されている。願文、表白の最新の研究である山本真吾『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』（汲古書院、2006年、90頁）もそのように述べている。私自身も以前に『本朝文粋』所収の文体を解説してそのようにのべた。「願文　仏事を行う時に施主の祈願の意を述べた文章」（新日本古典文学大系『本朝文粋』、岩波書店、1992年）。

しかし、そうではない願文もあった。そのことに気付いたのは、空海が作った願文を読解した論文を通してであった。この論文は、最初に「願文とは、法会を企てる施主の願意を述べたものであり」と規定したのち、空海作の願文の一例として「天長皇帝、故中務卿親王の為に田及び道場の支具を捨てて橘寺に入るる願文」を取り上げて、注解を加え、文章構成を分析するが、表題から、「本作品は、淳和天皇が早逝した異母弟伊予親王の菩提を祈って、天長四年（827）九月に法華経を講ぜしめ、田地・道場などを大和国高市郡の橘寺に施入した時、空海が代筆した願文である」という。この理解に異論はない。であれば、施主は淳和天皇であり、この願文は淳和天皇の立場で書かれているはずである。ところが注解を読み進むと、次のような通釈に出会うのである。（1）「私空海がひれ伏して思うことに、故中務卿の伊予親王は、輝ける日光のような天皇家の一門であり、尊い月のような皇族であらせられる」（伏して惟みれば、故の中務卿の親王、爀曦の玉葉・円舒の金柯なり）、（2）「天皇陛下は深く嘆き悲しまれて、食事ものどを通らず味をお忘れになるほどである」（聖襟慟むで味を忘れ）、（3）「功徳の福は、淳和天皇の聖なる御身に廻向されて」（福、聖躬に廻らして）。これらの解釈は、願文は施主（ここでは淳和天皇）の立場で書かれるものという理解とは矛盾する。これは作者である空海の立場で書かれているとしての解釈である。

これはどう考えればいいのだろうか。私はまず、これらの文をやはり施主の立場で書かれているとして読めないだろうかと考えた。（1）はそう読んで差し支えない。（2）（3）であるが、これが天皇の願文であることから、「聖襟」「聖躬」は自敬表現と見ることはできないかと考えたが、（2）はともかく、（3）の「福、聖躬に廻して」を淳和天皇の立場に立って、福徳が我が身にも及ぶようにと述べていると解することは無理である。やはりこの論文のように作者空海の立場で書いていると解するよりほかないだろう。

改めて『性霊集』に収められた空海の願文を見てみると、同じ性格の願文がほかにもある。「東太上、故中務卿親王の為に檀像を造刻する願文」（巻六）である。東太上は嵯峨上皇。故中務卿親王は先の願文と同じ伊予親王である。つまり、嵯峨上皇が伊予親王のために白檀の仏像を造った時の願文で、施主は嵯峨上皇。したがって、通説によれば、施主嵯峨上皇の立場でその願意を述べているはずである。ところが次のような表現がある。「伏して惟（おもんみ）れば、皇帝陛下、允（まこと）に仁、允に慈にして、含弘光大なり」。この一文のあることによって、この願文は嵯峨上皇（天皇）ではなく、作者空海の立場で書かれていることは明白である。このような明徴のある作があることから、先の願文の読み方は、先の論文のとおりでよい。ただし、そうなると、少なくともこの二篇の願文については、願文は施主の願意を述べたものと規定することはできなくなる。

このような、施主ではなく代作者の立場で願意を述べた願文がほかにもあるのか、そのような目で諸作品を改めて見直さなければならない。

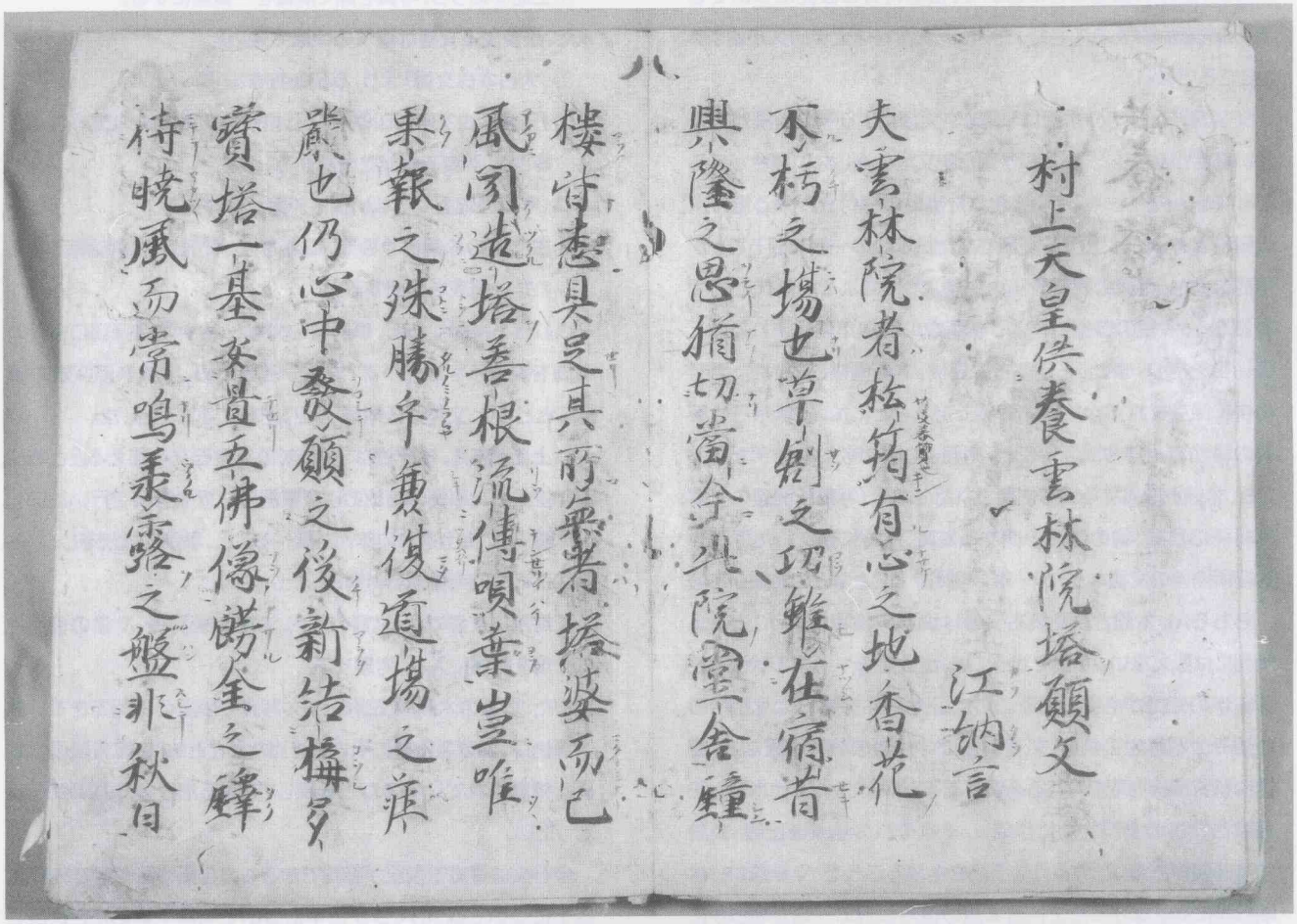
もう一篇の論文、これは誤読だろう。平安中期、10世紀後半に

活躍した藤原惟成が書いた「書写山の講堂を供養する願文」（『本朝文集』巻29）の注釈である。永延元年（987）の日付けがある。このように書き出されている。

沙弥性空、躬を曲め掌を合はせて、仏に白して言はく、

これによって、この願文は講堂供養を行う施主の性空が仏に申し述べるというかたちで書かれているとして読まなければならない。ところが、この論は、その第三段落とするところ、「抑もまた弟子、稚少の昔より、老大の今に至るまで、地望の頑質を顧ず、窃かに天台の教門を伺ふ。……、二三年来、天台大師の忌辰に至る毎に、聊か十講の席を展べ、敬ひて一乗の文を講ず」という記述を「惟成は、幼少の昔から出家の機会を窃かに伺っていたと言い、この二三年来、天台十講を人々の薫育のために行ってきたという」と解している。すなわち、作者惟成が自らのことを述べていると理解している。しかし、これはそうではない。この願文は通説に従って読むべきである。つまり、全篇,施主性空の言葉として述べられているのである。この小文では細かに述べる余裕はないが、そう読んで差し支えるところはない。ここも性空の体験として読まなければならない。

平安朝の漢文のなかで、願文は他の文体の作品に比べて、研究は進んでいるといえるが、なお考えるべきことは多く残されている。


村上天皇供養雲林院塔願文
江納言
夫雲林院者松箱有心之地香花
不朽之場也草創之功雖在宿昔
興隆之恩猶切當今兆院堂舍鐘
樓守悉具足其所無者塔婆而已
風図造塔善根流傳唄葉豈唯
果報之殊勝乎兼復道場之業
歳也仍心中發願之後新結梅多
寶塔一基安置五佛像鬱金之鐸
待暁風而常鳴秉露之盤非秋日

『本朝文粋』所収の願文

大江維時が作った「村上天皇、雲林院の塔を供養する願文」（巻13）の冒頭。河内長野市、天野山金剛寺蔵の鎌倉時代の写本。

上代の一次資料における用字法と文体の調査と考察

COE研究員　金子 正孝

平成18年度COE研究員研究計画

文字のなかった日本に漢字漢文がもたらされ、どのように和語を表記していったのか。その工夫の一端を明らかにすべく、上代の一次資料を対象として、文体と用字法の考察をすすめている。もともと漢字漢文は中国語を表記する文字である。それを用いて日本語を表記すると、発音や語序が違うため、日本特有のさまざまな工夫がみられるのである。以上の点は上代の文字資料である記紀万葉等の写本の他、一次資料の金石文や正倉院古文書、木簡等にみることができる。

これまで、記紀万葉を中心に古くから考察がなされており、中国の影響を受けた精密な漢字の使い分けや文体の統一など、漢字漢文で日本語を表記する際の多くの点が判明した。また、漢字の音訓、語序の破格などにおいて、日本特有の表記についても多くの考察がなされてきた。一方、一次資料は近年研究が始まったところである。

文字資料としての木簡は、腐蝕や欠損により字の判読ができない場合があること、断片しか残らず文意の通じない場合があることなどの欠点もあるが、書かれた当時の墨付きが残る第一次の資料であること、日常に使用された日本語の一端を知ることが可能なこと、年紀の記載や出土遺跡よりおおよその年代が判明すること、今後の発掘調査より事例数の増加が見込まれるなどの特徴を持つ。また、正倉院古文書は、木簡同様、書かれた当時のまま保存されてきた一次資料であることに加え、年月日や筆者の書かれた場合が多いこと、木簡より事例数が多い字があること、木簡とは異なる場で使用された日本語（写経所関連の文書、写経時の目録、物の発注の関する文書、紙背に残された戸籍や写経所関連の文書など）の一端が判明することなどの特徴がある。

もちろん、木簡と正倉院古文書は資料の性格が違うことから同列には扱えない。木簡を扱うには、出土遺跡や遺構の状況など考古学の知識が必要である。また、正倉院古文書では写経所の仕組みや写経生の情報、紙背文書での戸籍の研究成果など、幅広い研究成果を取り入れる必要がある。そのため、上代木簡と正倉院古文書の資料を別に作成し、それぞれの結果を比較・対象する必要がある。このような手続きを経ることで、文献類からは明らかにできなかった上代日本語の使用状況の一端が明らかになるだろう。

以上、上代の一次資料の特徴を述べた。これらのうち、本プログラムでは文体と用字法の考察を行うべく、取り組んできた。2年の研究員の任期のうち、1年目の昨年度は漢文訓読の影響があると考えられる「未」「将」「当」「応」などの再読文字、「不」などの助動詞、「自」「従」などの助詞、「无（無）」などの形容詞、「在」「有」などの動詞で使用される漢字について、事例を集めた。木簡は、以下の手順で進めた。

①奈良文化財研究所「木簡データベース」にて、当該字を検索し、全体の見通しを立てる。

②データベースや出典、調査報告書等より、写真で表記を確認する。（写真の確認できない例は対象から外す。）

③釈文、出土遺跡・遺構番号、写真、出典の解説などの情報をカード化する。

④上述③のうち、写真を除く情報を一覧表にする。

また、正倉院古文書は以下の手順で進めた。

①『大日本古文書』より、事例を抜き出す。

②『正倉院古文書影印集成』「正倉院古文書マイクロフィルム」等より、写真で表記を確認する。
（写真の確認できない例は対象から外す。）

③古文書の年月日や種類、筆者など、事例の文書の情報を入れた一覧表を作成する。

これらを検討すると、事例数の少ない字や写真確認に多くの時間を要する字などがでてきた。そのため、字体や用字法の確認にとどまり、文体は任期終了後に考察することとした。

以上を踏まえ、本年度は、調査対象を金石文を加えるとともに、昨年度集めた事例の確認および事例の分析や考察を行いたい。

木簡では、出土遺跡の年代を調べること、事例の試読をし、文体、用字法の面で考察する材料としたい。

正倉院古文書では、文書の年代、文書の筆記者、文書の使用された場を考慮に入れ、考察する。

また、以上の木簡や文書のうち、写真で表記の確認できていない事例は、調査報告書に引き続き当たるとともに、書道関係で写真が掲載されている本などを探し、できるだけ多くの事例を確認したい。

金石文は写真で表記が確認できるものを集める予定である。以上については、いくつかの字について考察を始めたところである。本年度中に調査の終了した字について、随時2年間の調査結果をまとめる。また、任期終了後は引き続き、調査を継続したい。

『佛乗禪師東歸集』の基礎的研究

COE研究員　根木 優

平成18年度COE研究員研究計画

1.伝自筆本と版本との比較から

今年度の計画としては、(1)『仏乗禅師東帰集』(以下、『東帰集』と略す)の伝自筆本と版本との比較から見えてきた問題や昨年度の調査報告を論文にまとめる。(2)また、疑問を残した部分を追求するとともに伝自筆本にのみ収録される偈頌十一篇の訳注に取り組みたい。昨秋、鎌倉・報国寺より刊行された『東帰集』の訳注本は元禄十六年の版本を底本としているため、伝自筆本にのみ収録されるこれら十一篇については言及がない。また、これらの十一篇の一部は東京大学史料編纂所に所蔵される影写本(冊子部)によって閲覧が可能であったとはいえ、一部(巻子部)は影写本が存在しておらず閲覧することが極めて困難であった。そのため訓読や訳注がこれまで全く進んでいなかった。そこに、これらの訳注を試みる意義があると思われる。また、これらの訳注を試みることで、これらの作品がなぜ版本に未収録であるのか、その理由についても考察したい。

2.新出資料:報国寺蔵『東帰集』書入れ本に関する調査

―引用書目から見る江戸後期の『東帰集』受容について―

(1)新出資料:報国寺蔵『東帰集』書入れ本に関する調査

新出資料として報国寺に所蔵されている『東帰集』(元禄十六年刊)の版本を調査する。この本は他の版本と異なり、江戸後期と見られる精緻な書入れ(鎌倉・報国寺住持によるものか)が施されている。その書入れがいったいどういうものであるのかを明らかにしたい。また、駒澤大学図書館に所蔵される同版本にも江戸後期の精緻な書入れ(近江・千手寺住持によるものか)があることから、これらの書入れが具体的に何を示しているのか比較検討することによって、当時の『東帰集』受容の一端を知ることができるのではないかと考える。また、江戸後期において五山文学を研究した学僧の資料としても価値があると思われる。

(2)引用書目の一覧化

書入れ本は、詩句の典拠について言及した部分が多く見られるため、その引用書目を一覧化し、江戸後期に『東帰集』を読む場合、どのような書物を使って読み進めていったのかを考察する。

ただし、報国寺蔵書入れ本は、注釈の対象となる詩句が必ずしも書入れと同じ丁の中にあるとは限らず、数丁先に書き込まれていたり、袋綴じの中に別に紙を差し込み、そこに書き込んでいる例などが多々見られた。『東帰集』の注釈書としてこの書入れ本を実際に利用するには、このように点在している書入れをそれぞれの詩題ごとにまとめるなどの分類整理が必要不可欠である。この作業を行うことによって、書入れ本は他の五山文学作品を読解する上でも非常に有用な辞書ツールになると思われる。その前段階として、引用書目の一覧化を目標とする。引用書目に関する現段階での調査報告をすれば、次の如くである。(引用回数の上位から順に記す。( )内は引用回数。回数の少ないものは省略。以下同じ)

【報国寺蔵書入れ本】

円機活法韻学全書(324)、翻訳名義集(180)、點鉄集(167)、禅林類聚(125)、江湖風月集(110)、大光明蔵(90)、碧巖録(77)、康熙字典(74)、祖庭事苑(70)、五家正宗賛(67)、三体詩(63)、景徳伝灯録(60)、唐詩選掌故(57)、釈氏要覧(47)、寂室和尚語録(45)、論語(39)、荘子南華真経(37)、古文真宝(36)、文選(30)、史記評林(28)、義楚六帖(28)、首楞厳義疏注経(27)など

【駒沢大学図書館蔵書入れ本】

五灯会元(44)、延宝伝灯録(15)、釈氏稽古略(8)、禅林類聚(8)、東坡集(8)、荘子(7)、景徳伝灯録(7)、明極和尚語録(6)、仏祖統紀(6)、祖庭事苑(5)、禅林僧宝伝(5)、前漢書(5)、説文解字(4)、詩経(4)、史記(3)

また、報国寺蔵書入れ本はこれらの引用に際して引用書の巻数と丁数を明記している。報国寺に所蔵される典籍と比較対照して現在調査中であるが、引用の際に実際に使用したと思われる典籍の一部は現存していることが分かった。

(3)書入れをした人物の特定

最後に、報国寺蔵『東帰集』に書入れをした人物について現段階での調査報告を記す。書入れをした人物については、報国寺蔵『東帰集』書入れの中に「嘉永四年(1851)、四威儀ノ巻末記録」とあり、報国寺26世(後に建長寺222世)即門恵樞(?～1862)の日記『山中四威儀』(1830～1858)の記事の一部をそのまま抜き出して引用している部分が見られた。この『山中四威儀』の筆跡と『東帰集』の書入れは酷似していることなどを考え合わせ、現段階では書入れをした有力な候補者として、この即門恵樞を挙げておく。

日本における辞賦文学の受容と実作に関する研究

COE研究員　小嶋 明紀子

平成18年度COE研究員研究計画

日本漢文の長い歴史において、「詩」ジャンルの実作は、中国の詩の伝統に則り彼の地の文学言語を吸収しつつも、日本人独特の感性を活かした特異なものであり、世界でも類を見ない独特な文学作品となっている。

しかしながら、「詩」以外の漢文学ジャンルの実作については、一部の散文を除いてはほとんど注目されていないのが実状であろう。

中国には多くの文学ジャンルがある。文学ジャンルの多様性は中国文学の豊饒さの一因であり、ジャンル論は中国の文学理論の中核のひとつとなっている。あらゆるジャンルの実作への試みは、中国の文人にしばしば見られることである。

日本人にもまた、中国の多様な文学ジャンルに注目し、自ら実作しようと試みてきた人々がいる。むろん大多数の日本人にとっては、漢語による「詩」――いわゆる「漢詩」――を実作するだけで精一杯であっただろうし、それ以外の文学ジャンルの実作まで試みたのはほんの一握りの人々だけであっただろう。しかし、これは決して日本人の中国文学のジャンルに対する無関心を表すのではない。

「賦」は、『文選』の巻頭に並べられていることからも明白なように、中国では「詩」と並ぶ主要な文学ジャンルである。「賦」は形式の類似した「辞」と併せて「辞賦」と呼ばれることもある。「賦」は日本漢文学にも大きな影響を与え、日本人による「賦」作品も多く残されている。しかし、従来の研究では、日本の「賦」は中国の「賦」文学の流れと関連づけて詳細に論じられることは少なかった。

「詩」以外の文学ジャンルについては、中国の同ジャンルの作品と比較し、研究することが不可欠であろう。特に、「賦」は典故の多用、事物の羅列、対句の多用、押韻法の多様さなど、いくつかの属性を持つジャンルであるため、内容解読に大きな困難を伴う。日本人による賦作品のうち、著名な作品については内容解読がなされてはいるが、今後は中国の歴代の賦作品の変遷と比較し、さらに精密な研究がなされるべきである。

藤原明衡撰『本朝文粋』は、梁の昭明太子撰『文選』に倣い、巻頭に十五篇の「賦」作品を並べており、その配列も『文選』に倣いテーマ別になっている。このことは当時の人々の「賦」に対する重視の一端を窺わせるに足る。そこで、『本朝文粋』所収の賦作品と、『文選』所収の賦作品を表現方法や着想などを手がかりに比較し、『文選』所収の賦作品が日本人にどのように受容されたか検討したい。

また、五山文学僧の作品では、虎関師錬『済北集』に六篇の賦作品が収録されている。さらに夢巌祖応『旱霖集』にも辞賦系統の作品が見られる。これらの作品が閑却されては、五山文学における中国文学の受容のスケールを明らかにすることは出来ないであろう。

以上のことから、日本漢文学における中国文学の受容について多角的に検討するために、日本漢文学における賦作品の受容と実作について研究を行っていきたい。やがては、日本の「賦」文学史をまとめ、それを中国の「賦」文学史と対照させ、日中の「賦」文学史を完成させたいと考えている。

了誉聖冏における漢籍及び神道書の受容に関する研究

COE研究員　鈴木 英之

平成18年度COE研究員研究計画

了誉聖冏（1341～1420）は、南北朝から室町期にかけて活躍し、後に浄土宗七祖・浄土宗中興の祖と称された学僧である。当時の浄土宗は、公には一宗と認められていなかったことから、浄土教学の確立に努め、伝法制度を定めて浄土宗の独立教団化の基礎を作り上げた人物として知られる。

聖冏は、浄土宗義宣揚のため、生涯に漢文を用いた百数十巻にも及ぶ著作を書き残したが、その学問は非常に広範囲にわたり、仏教のみならず、漢籍や神道書といったいわゆる「外典」に対する研究もおこなっていた。本研究ではこれら外典受容の過程に注目していきたい。

漢籍については、『釈浄土二蔵義』『伝通記糅鈔』といった聖冏の主要な浄土教学書に多数の引用が見られる。例をあげれば、『論語』『周礼』『尚書』『礼記』『春秋』『孝経』などの経書の類が語句の註釈に用いられ、『老子』『荘子』などが阿弥陀仏の身体についての議論の中で用いられている。また『史記』『漢書』『三国志』といった史書により史実が検討される箇所もあるなど、聖冏の漢籍についての教養・知識は、かなり高度なものであったことがうかがえる。

従来の聖冏研究では、出典考証をおこなっても仏典に対してのものが主で、漢籍に注目した研究は皆無であった。しかし、聖冏著作には、前述の通り漢籍の引用が多数確認できることから、これらが聖冏の浄土教学に何らかの影響を与えた可能性があり、等閑視できない。よって本研究では、聖冏著作における漢籍の出典考証をおこない、それがいかなる教理の中で用いられ、いかなる役割を果たしたのかを検討する。これにより、聖冏の思想研究、また中世の浄土教研究に新たな視点を見いだすことが可能になると思われる。

また、聖冏は、神々などの在地の信仰についても並々ならぬ関心を示した。通常、浄土宗や浄土真宗といった専修念仏集団では、宗祖である法然が、浄土往生のために「正行」である念仏を専らとすべきことを説き、阿弥陀仏以外の一切の礼拝を「雑行」として制限したことから、神々との関わりは必然的に消極的なものとなっていた。

しかし、聖冏は、浄土宗中興の祖と称されたほどの学僧でありながら、本来ふれる必要のない神々と積極的に関わり、外典である神道書を研究、自らも複数の神道関係の書物を著した。それは『日本書紀』の註釈書から、中世最重要の神道書『麗気記』の註釈書にいたるまで、単なる学問的興味とはいいきれないほどの分量と革新性をもつ。これらは、専修念仏集団における神観念や、外典受容の過程を知る上で重要なものと考えられるが、神道・仏教両方の知識が必要で難解なため、ほとんど研究がなされていない。よって本研究では、漢籍受容の研究とともに、聖冏の神道関係著作を検討し、その特色を明らかにしたい。

さらに上記の研究と並行して、聖冏著作に直接的・間接的な影響を与えた平安・院政期の浄土教文献と漢文文献の註釈研究をおこなう。特に永観、珍海らの浄土教文献や、大江匡房の漢文文献に関する註釈研究をおこなう。一部の成果は、吉原浩人編『永観講式集』（二松学舎大学COE 21世紀プログラム）で近く公刊する。

以上の計画に基づき、平安朝から室町期にかけての浄土教、特に聖冏の著作をとりあげ、漢籍や神道書などの外典受容の諸相を考察することにより、従来の浄土教学研究の枠組みにとらわれることなく、日本思想史、文学史上における聖冏の位置付けを明確にすることができ、また最終的には、漢籍や神道書などの外典類が、日本の浄土教に果たした役割の一端をうかがい知ることが可能になると思われる。なお、研究成果の一部は、国際シンポジウム「世界における日中文化と文学」（東北師範大学文学院・外国語学院共催　於東北師範大学／中国・長春市　2006年9月）、日本印度学仏教学会（第57回学術大会　於大正大学　2006年9月）にて、発表する予定である。

寄贈資料一覧

（平成18年1月～平成18年7月）

■一般書籍

タイトル	発行所（発行年）
漢文教育の諸相　研究と教育の視座から	大修館書店(2005.12)　〔田部井文雄氏　寄贈〕
聖徳大学言語文化研究所　論叢　13	聖徳大学言語文化研究所(2006.2)
論語思想史	万巻楼図書股_有限公司(2006.2)　〔松川健二氏　寄贈〕
成田山仏教図書館報　復刊第七十四号	成田山仏教図書館(2006.4)
第46回杏雨書屋特別展示会「曲直瀬道三－五百年の歴史」	杏雨書屋(2006)
郷土資料目録　家分文書　第25集	大垣市教育委員会(2006.3)
域外漢籍研究集刊　第2輯	中華書局(2006.5)
徳川日本《論語》解釈史論　東亜文明研究叢書59	台湾大学出版中心(2006.2)　〔黄俊傑氏　寄贈〕
宮内庁書陵部　書庫渉猟　書写と装訂	おうふう(2006.2)　〔櫛笥節男氏　寄贈〕
申江勝景図	江蘇古籍出版社(2003.1)　〔呉平氏　寄贈〕
中国古籍文化研究　第四号	早稲田大学　中国古籍文化研究所(2006.3)

■目録

タイトル	発行所（発行年）
山梨県立図書館　蔵書目録　総記・哲学・歴史　第1巻	山梨県立図書館(1977.11)　〔吉原浩人氏　寄贈〕
山梨県立図書館所蔵国書目録	山梨県立図書館(1988.3)　〔吉原浩人氏　寄贈〕
日本全国書誌　2006-16 』 2575	国立国会図書館(2006.5)

■報告書

タイトル	発行所（発行年）
報徳博物館館報　創刊号～第14号	報徳博物館(1983.9～2006.3)
漢字と文化　京都大学21世紀COEプログラム漢字文化の全き継承と発展のために 第6・7号	京都大学人文科学研究所(2005.11,2006.2)
ポスト・ソヴィエト期(1991-2004)のロシアにおける日本研究	法政大学国際日本学センター(2005.3)
国際日本学　法政大学文部科学省21世紀COEプログラム採択日本発信の国際日本学の構築　研究成果報告集　第3号	法政大学国際日本学研究センター(2005.3)
国際日本学の構築に向けて　21世紀COE国際日本学研究叢書2・3	法政大学国際日本学研究センター(2005.3,2006.3)〔王敏氏　寄贈〕
日中の文化関係を考える(その2)　文化摩擦(ずれ)から文化交流へ	法政大学国際日本学研究センター(2005.3)
The Newsletter HOSEI I.J.S.　No.2・3	法政大学国際日本学研究所・法政大学国際日本学研究センター(2005.11,2006.3)
日本中国語学会第55回全国大会予稿集	株式会社好文出版(2005.10)　〔佐藤進氏　寄贈〕
21世紀COEプログラム愛知大学国際中国学研究センター　News Letter　8	愛知大学国際中国学研究センター事務室(2006.2)
先端社会研究　特集場所と社会調査　第3号	関西学院大学大学院社会学研究科21世紀COEプログラム「人類の幸福に資する社会調査」の研究(2005.12)
日本文化と神道(Japanese Culture and Shinto No.1)　國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」平成17年度成果論文集 1 第2号	國學院大學21世紀COEプログラム研究センター(2006.2)
青波　東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生―　第1号	特定領域研究「東アジアの海域交流」総括班秘書組(2006.2)
News Letter　第3号	早稲田大学演劇博物館 演劇研究センター(2006.3)
演劇研究センター紀要　6・7	早稲田大学演劇博物館(2006.1)
幼児教育ハンドブック	お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 誕生から死までの人間発達科学 (2004.8)
Early Childhood Education Handbook	お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 誕生から死までの人間発達科学 (2004.8)
お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 誕生から死までの人間発達科学 事業概要	お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 誕生から死までの人間発達科学

寄贈資料一覧

（平成18年1月～平成18年7月）

■報告書

タイトル	発行所（発行年）
お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 誕生から死までの人間発達科学 研究実績報告　2002-2004	お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 誕生から死までの人間発達科学
公開講座 移行の危機を乗り越える　ヒトと人　第1回	お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 誕生から死までの人間発達科学
誕生から死までのウェルビーイング－老いと死から人間の発達を考える 誕生から死までの人間発達科学　第1巻	お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 誕生から死までの人間発達科学（2006.4）
アジア文化交流研究　第1号	関西大学アジア文化交流研究センター(2006.3)
環流　inter-action　関西大学アジア文化交流研究センターニューズレター　第1・2号	関西大学アジア文化交流研究センター
「21世紀COEプログラム」の現況等に関する検証と今後の展望について 検証結果報告書	21世紀COEプログラム委員会(2006.3)
古代日本形成の特質解明の研究教育拠点 奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集 Vol.3～6	奈良女子大学人間文化研究所COEプログラム
国際講演会東アジアの古代都市	奈良女子大学人間文化研究所COEプログラム
奈良と古代　奈良女子大学21世紀COEプログラムNewsLetter　No.5	奈良女子大学21世紀COEプログラムNewsLetter編集委員会（2005.12）
21世紀COEプログラム拠点形成計画「構造生物学を軸とした分子生命科学の展開」 外国人研究者による研究評価	兵庫県立大学大学院生命理学研究科(2006.2)
非文字資料研究　The Study of Nonwritten Cultural Materials	神奈川大学21世紀プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進委員会(2006.3)
年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化　第3号	神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議(2006.3)
非文字資料研究　The Study of Nonwritten Cultural Materials 神奈川大学21世紀プログラム　人類文化研究のための非文字資料の体系化　10	神奈川大学21世紀プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進委員会（2005.12）
江戸時代医学・本草学資料の整理と研究　平成14～15年度文部科学省研究費抑制補助金研究成果報告書(研究課題番号14023235)	北里研究所東洋医学総合研究所(2004.3)〔町泉寿郎氏　寄贈〕
江戸時代医学・本草学資料の整理と研究Ⅱ　平成14～15年度文部科学省研究費抑制補助金研究成果報告書(研究課題番号14023235)	北里研究所東洋医学総合研究所(2006.3)〔町泉寿郎氏　寄贈〕
慶應義塾図書館所蔵　閩斎堂刊『新刻増補批評全像西遊記』の研究と資料（上） 東北アジア研究センター叢書　第19号	東北大学東北アジア研究センター(2006.3)
21COE news letter　九州産業大学21世紀COEプログラムニュースレター　1～4	九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター(2005.3)
九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集　1・2	九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター編集委員会(2005.3)
奈良と古代　奈良女子大学21世紀COEプログラムNewsLetter　6	奈良女子大学21世紀COEプログラムNewsLetter編集委員会（2006.3）
Newsletter　No.12・13	慶應義塾大学21世紀COE人文科学研究拠点 心の統合的研究センター
心の解明に向けての総合的方法論構築　21世紀COEプログラム平成16年度成果報告書	慶應義塾大学21世紀COE人文科学研究拠点 心の総合的研究センター(2005.12)
心の解明に向けての総合的方法論構築　21世紀COEプログラム平成17年度成果報告書	慶應義塾大学21世紀COE人文科学研究拠点 心の総合的研究センター(2006.3)
UTCP研究論集　第4～7号	東京大学COE「共生のための国際哲学交流センター(2006.3)
UTCP Bulletim　HPS Workshops in Beijing and Tokyo　Volume 6	東京大学COE「共生のための国際哲学交流センター(2006.3)
二松　第19・20集	二松学舎大学大学院(2005.3,2006.3)
東アジア学術総合研究所　通信　第16号	二松学舎大学東アジア学術総合研究所(2006.3)
二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊　第36集	二松学舎大学東アジア学術総合研究所(2006.3)
二松学舎大学人文論叢　第76輯	二松学舎大学人文学会(2006.3)
陽明学　春日潛庵特集号　第18号	二松学舎大学東アジア学術総合研究所陽明学研究部(2006.3)
二松学舎大学論集　第49号	二松学舎大学(2006.3)

※ご寄贈いただき感謝申し上げます。

活動・会議一覧

（平成18年4月～平成18年7月）

●講演会等

■公開講演会

開催日	主催等	講師	所属	演題
18.04.13	COE	マーガレット・メール	デンマーク・コペンハーゲン大学　助教授	明治時代の教育における漢学塾の役割
18.07.04	COE	呉　平	中国・華東師範大学図書館　古籍部主任	盛宣懐と愚斎図書館について

■テーブルスピーチ

開催日	主催等	講師	所属	演題
18.04.20	COE	浅井 昭治	全国学校図書館協議会参与	旧制中等学校の漢文教材と方谷・中洲の詩文
18.06.15	COE	呉　格	中国・復旦大学教授	『中国所蔵和刻本漢籍刊記図録』の編纂について

■COE研究報告会

開催日		報告者	所属	演題
第1回	18.07.19	佐藤　進	事業推進担当者	中国の古典学習と日本の訓読学習

■COE研究発表会

開催日		報告者	所属	演題
第1回	18.05.13	小嶋明紀子	COE研究員	虎関師錬の賦をめぐって
		金子　正孝	COE研究員	上代一次資料にみられる「无」「無」字について
第2回	18.07.08	根木　優	COE研究員	報国寺蔵『東帰集』書入れ本について ―引用書目から見る江戸後期の『東帰集』受容―
		川辺　雄大	COE研究助手	明治期の日本国内における唐本流通について ―岸田吟香書翰を中心に―
		岡野　康幸	COE研究助手	日本漢文学に於ける分類の問題点 ―『江戸漢学書目』編集を通じて―

●現地調査等

■国内調査等

氏名	期間	行き先	主な調査機関
町　泉寿郎	18.04.18～18.04.19	大阪市	武田科学振興財団
會谷　佳光	18.04.18～18.04.27	東京都・千代田区	国立公文書館内閣文庫
町　泉寿郎	18.04.20	東京都・港区	慶応義塾大学斯道文庫
會谷　佳光	18.05.01～18.05.30	東京都・千代田区	国立公文書館内閣文庫・国会図書館
佐藤　進	18.06.09～18.06.10	京都市	日本電気化学株式会社
山辺　進	18.07.11	足利市	史跡足利学校
川辺　雄大	18.07.24～18.07.28	金沢市　白山市	常福寺　本誓寺　白山市図書館

■会議等参加

氏名	期間	行き先	会議等
小嶋明紀子	18.06.23～18.06.25	函館市	中国文化学会大会（発表）
上地　宏一	18.07.06～18.07.07	金沢市	図書館・情報科学に関する国際ラウンドテーブル会議
高山　節也	18.07.27～18.07.29	吹田市	関西大学　国際学術フォーラム
町　泉寿郎			
河野貴美子			

活動・会議一覧

（平成18年4月～平成18年7月）

●諸会議

■推進委員会

第20回	18.04.19
第21回	18.05.17
第22回	18.07.19

■事業推進担当者会議

第18回	18.04.20
第19回	18.05.18
第20回	18.06.15
第21回	18.07.19

■実施委員会

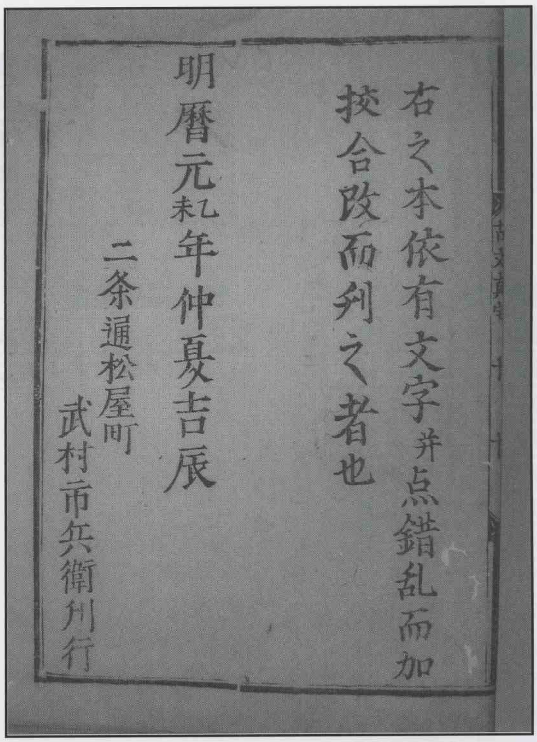
第51回	18.04.05
第52回	18.04.10
第53回	18.04.13
第54回	18.04.17
第55回	18.04.24
第56回	18.04.27
第57回	18.05.08
第58回	18.05.12
第59回	18.05.25
第60回	18.06.01
第61回	18.06.12
第62回	18.06.29
第63回	18.07.13
第64回	18.07.31

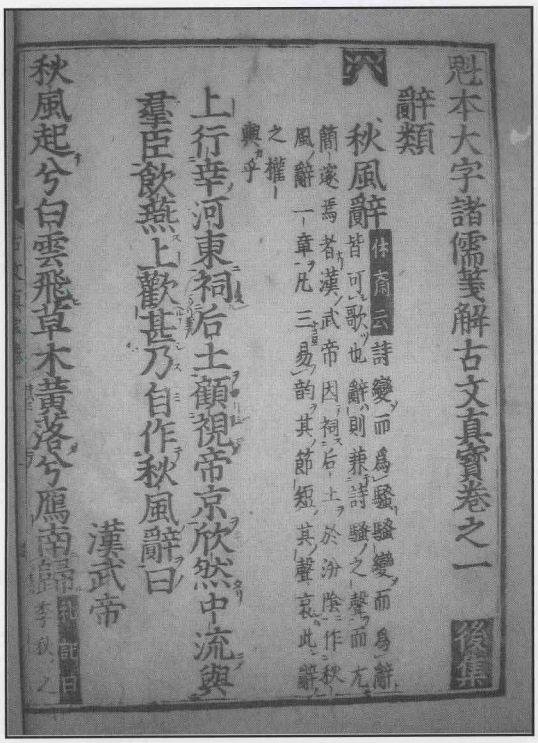
■編集委員会

第13回	18.04.13
第14回	18.07.06

●COE刊行物等（平成16・17年度）

書　誌　名	担　当　班　等	刊行月
国際シンポジウム　東アジアにおける漢字文化活用の現状と将来―報告書―	COE事務局	17.03
二松漢文 基礎漢文―漢詩編―	漢文教育班	17.03
二松漢文 基礎漢文―思想編―	漢文教育班	17.03
藤原通憲資料集	中世日本漢文班	17.03
2004年度 公開講演会報告	COE事務局	17.09
2005年国際シンポジウム報告　世界における日本漢文学研究の現状と課題	COE事務局	18.01
日本漢文学研究　創刊号	日本漢文学研究編集委員会	18.03
日本漢文資料 楽書篇　雅楽資料集《論考篇》	中世日本漢文班	18.03
日本漢文資料 楽書篇　雅楽資料集《資料篇》	中世日本漢文班	18.03
声明資料集　日本漢文資料 楽書篇	中世日本漢文班	18.03
三島中洲研究　vol.1	近世・近代日本漢文班	18.03
倉石武史郎講義『本邦における支那学の発達』	近世・近代日本漢文班	18.03
江戸漢学書目	近世・近代日本漢文班	18.03
江戸明治漢詩文書目	近世・近代日本漢文班	18.03
漢文文法と訓読処理　―編訳『文言文法』―	日本漢字音・辞書・字書班	18.03
二松漢文 日本漢詩	総括班	18.03
二松漢文 日本漢文	総括班	18.03


右之本依有文字并点錯乱而加
挍合改而刊之者也
明暦元乙未年仲夏吉辰
二条通松屋町
武村市兵衛刊行


魁本大字諸儒箋解古文真寶卷之一 後集
辭類
秋風辭 体齋云 詩變而為騷騷變而為辭皆可歌也辭則兼詩騷之聲而尤簡遠焉者漢武帝因祠后土於汾陰作秋風辭一章凡三易韵其節短其聲哀此辭之權輿乎
上行幸河東祠后土顧視帝京欣然中流與羣臣飲燕上歡甚乃自作秋風辭曰
漢武帝
秋風起兮白雲飛草木黄落兮鴈南歸 紀記曰 李秋之

魁本大字諸儒箋解古文真宝後集

明暦元年京都武村市兵衛印本

編集後記

雙松通訊（そうしょうつうじん） 6号をお届けします。去る5月に中間評価ヒアリングを受けました。評価の結果はなお不明ですが、いずれにせよ研究・調査活動は日々推進しなくてはなりません。願わくは良好な結果をと思いつつ、18年度の研究計画を中心としたニューズレターを編集いたしました。

中間評価にむけて、これまでの計画を変更した部分、より充実したものにするべく新たに設けた目標などもあります。皆様のご意見やご助言をお待ちしております。

今年度からCOE客員研究員に、大阪大学名誉教授の後藤昭雄先生をお迎えすることとなりました。国文系比較文学の重鎮を得て、ますます充実した教育や研究上での成果が期待されます。（T）

二松学舎大学 21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」

『日本漢文学研究』(第2号)の原稿募集

■趣旨

日本漢文は、元来、漢字漢語(中国語)を基礎とする中国の学術・文化を受容する過程で、日本人が創り出した独自の方法による表現形式であり、同時にまた訓読法を通じて受け入れた学術・文化の内容そのものをも意味している。すなわち前近代においては、日本漢文は東アジア漢字文化圏の共通語としての性格をもちつつ、日本のすべての学術・文化の根幹であった。 ところが、明治維新以後はもっぱら西欧の学術・文化を学ぶのに忙しく、日本漢文は次第に等閑視されるに至った。特に、最近の科学優先の風潮の中ではこの傾向が著しく、日本の伝統的な学術・文化の理解は真に危機的な状況にある。

一方、海外の諸国においては、近年ますます日本の学術・文化に対する関心が高まり、日本研究が盛んになってきている。それに伴い、日本漢文学研究の重要性もあらためて認識されてはいるが、現状ではまだ日本漢文学研究者の層は薄く、少数が世界各地に散在しているに過ぎない。 このような日本漢文学そのものの本質とその研究状況の認識にたてば、現在本COEプログラムに求められるものは、まさにこれらを統轄する広範でより充実した研究体制の確立と、それに対応して研究成果を交換する機関誌の創刊である。それは世界的研究拠点の構築をめざす本プログラムのために課せられた責務であるとも言えよう。

今回本プログラムが刊行する「日本漢文学研究」は、国文学・国語学・中国学・歴史学その他の分野すべて、日本漢文学研究に関係する諸学の分野の結集を期し、さらに国内外の研究者をも結集するものとして、日本語、英語による年一回の出版を予定しており、世界の日本漢文学研究の振興と発展に寄与すること大であると考える。

■内容等

- 思想、文学、歴史、芸術など漢文で表現された日本文化についての研究
- 日本漢文についての言語学的、書誌学的研究
- 漢文教育の過去、現在、未来についての考察と提言
- 漢学塾、漢学者などの社会史的研究
- 漢字漢語文化圏の比較文化研究
- その他、上記趣旨に添う研究

◆原稿締切

平成18年9月29日(金)

◆原稿様式

原則としてワープロ原稿とします。
但し、手書きの原稿も可としますが、掲載決定時にはFD,CD等の電子媒体で改めて最終原稿を提出していただきます。

◆原稿枚数

400字詰原稿用紙20枚以上60枚を限度とします。
(1200字以内の要旨および英文表題を付してください。)
論文以外は、特に下限をもうけないが上限60枚以内とします。

◆発行

平成19年3月(予定)

◆その他

・投稿者の制限は、特にありません。
・レフェリーによる査読を実施します。
・投稿ご希望の方は、「投稿要領」を参照してください。

◆提出・問い合わせ先

二松学舎大学COEプログラム事務局
〒106-8336 東京都千代田区三番町6-16
Tel:03-3261-3535 Fax:03-3261-3536
E-mail: coejimu@nishogakusha-u.ac.jp
URL:http://www.nishogakusha-coe.net/

晋率善胡仟長
『趙氏墓古印存』より

雙松通訊 No.6

発行日
平成18年8月10日

編集・発行
二松学舎大学 21世紀COEプログラム 実施委員会

〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16
TEL：03-3261-3535　FAX：03-3261-3536

e-mail：coejimu@nishogakusha-u.ac.jp
URL：http://www.nishogakusha-coe.net/